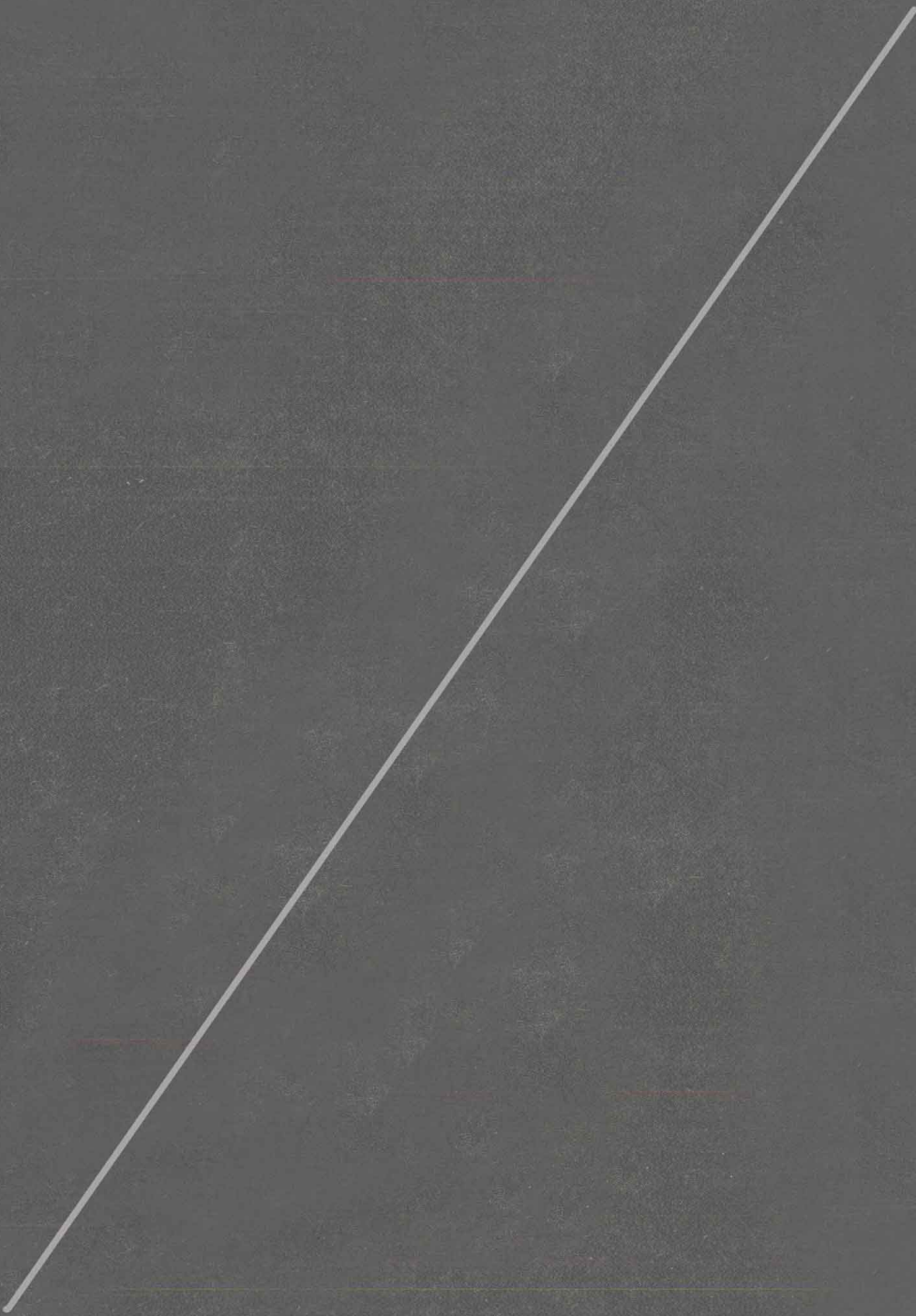




現代十人集

日本推理小説大系 16 東都書房

日本推理小説大系第16卷

現代十人集

定価三八〇円

著者

新章文子 大藪春彦 竹村直伸

高城 高 星 新一 曾野綾子

河野典生 結城昌治 南条範夫

黒岩重吾

発行者

西村俊成

印刷所

豊国印刷株式会社

製本所

藤沢製本株式会社

発行所

東都書房

東京都文京区音羽町三丁目一九

電話 東京(九四一)三三一一

振替 東京 七二七三二一

落丁乱丁本はおとりかえします

昭和三十六年七月二〇日第一刷

目次

新章文子	危険な関係	5
大藪春彦	野獣死すべし	115
竹村直伸	風の便り	151
高城高	ラ・クカラチャ	165
星新一	おーい　でてこーい	177
曾野綾子	能面の家	187
河野典生	狂熱のデュエツト	211
結城昌治	幽霊はまだ眠れない	225
南条範夫	飢渴の果	245
黒岩重吾	女蛭	265
日本推理小説史	中島河太郎	283
解説	中島河太郎	290
内外推理小説年表	中島河太郎	302

新章文子

危険な関係

第一章

1

——一月二十五日 日曜日

左の靴の紐が切れたのを感じて、勇吉は思わず立ちどまった。赤皮のひび割れた靴は、それでも丹念に磨き上げられていた。幾筋にも割れたひびと急作りの艶とは、全くおかしい対照だった。勇吉は手袋を脱ぎ、しゃがんだ。

「あら」

志津子は勇吉に覆い被さるようにして、

「紐が切れたの？ 弱つてたのかしら。気が付けば取り換えといたんやけれど」

そして、勇吉が寒さで自由にならぬ指先で紐を繋ぎ合わせようとするのを、

「うちがやったげるわ」と横から手を出した。

「いえ結構です、自分でやりますよ」

勇吉は志津子の手を払いのけた。しかし、紐を繋ぎ合わせ、それを靴の紐穴に潜らせること

は、繋ぎ目が邪魔をして仲々厄介だった。靴下はだしの左足を浮かせ気味に、右足に重心をかけてしゃがみこんだ姿勢の不安定さが、ふと勇吉に座棺の中の母を思い出させた。瘦せて一層小さくなった母は、狭い座棺の中で白い骨と化したのだ。しかし勇吉には何の感傷もなかった。二十二年前、暗い胎内で一つに結ばれていた、そして、戸籍の上で母の名と列記された、それだけのつながりで息子呼ばわりされてきたのが、勇吉にはむしろ迷惑だった。勇吉を祖母に預け、七年前まで妻子ある男に囲われていた母だった。時々顔は合わせたけれども、物心がついてからというもの「お母さん」と口に出して呼んだことは一度もなかった。それでも勇吉は母の一人息子であるために、京都から呼び戻され、既に冷たくなった母を葬ってやらねばならなかったのだ。二十年の間勇吉を育ててくれた祖母という証人がなければ、たとえ戸籍面ではどうであらうと、勇吉は母の存在なんか認めなかった筈だ。そして祖母から遺言として母への孝養を云い渡されていなければ、誰が彦根くんだりまで葬いになぞやって来るものか。へい具合に死んでくれたもんだ。これは、勇吉の偽わらざる感慨だった。月の無い夜、溝に足を突っこみ、運悪くそこだけコンクリートがこわれてい、向う脛をざっくりやられたのが母の致命傷となった。敗血症の症状が現われてから医者と呼んだが、甲斐はなかった。四十四歳。若いと云えば若い。しかし夫と呼べる相手もな

く、既に料理屋の仲居として草臥（くた）れのきている女である。将来は勇吉の負担となるのは見えていた。へ神は我れを見捨て給わず、かゝ口笛を吹きたいぐらいなのである。

勇吉は立ち上り歩き出した。意識して歩みを早めた。寄り添うようにした志津子は、時々小走りしなければならなかった。

「勇ちゃん、ちよっと」

不意に立ちどまって志津子が云った。息が切れていた。「ここよ、おさきさんが躓（つまず）いたのは」こわれたコンクリートの一箇所が鋭く尖っていた。志津子は露骨に劣りの感情を見せて勇吉を見詰めた。勇吉は不機嫌にその溝を跨いだ。バスの停留所はそこに見えた。

「もうここまでで結構ですから」

勇吉は手提袋を受け取ろうとした。しかし志津子は料理屋の娘らしい仕草で、ひょいと手提袋を後ろに隠した。

「いいのよ、遠慮せえでも。駅まで送ってあげる云うてるやないの」

そして二、三步先に立って歩き始めた。純白のモヘヤのショールを深々とまとった肩の線が意外になだらかで楚々としていた。母を焼く音を聞きながらぼんやりしていた時、勇吉の傍へ寄ってきて、つと勇吉の手を握った志津子の掌の感触を勇吉は思い出した。湿っぽく、生ぬるく、ふにやふにやしていた。不快だけれど感ぜなかった。今眼の前の志津子の肩から受ける感じは全くの別人だった。

「うち、二重人格かしらん思う時があるわ」これは通夜に志津子が洩らした言葉である。

「うちって気の弱いところがあるけれど、好きな人のためなら、どんなことだって出来ると思うの。人ひとりぐらい殺せるかもしれへんわ」勇吉への愛の告白に他ならなかったが、勇吉は聞かぬ振りをした。

砂塵をあげてバスが来た。

「ここまでで沢山です、失礼します、いろいろお世話になりました」

奪うように手提袋を取り、勇吉はバスに乗った。勇吉の邪慳よこづねさに志津子はたじろぎ、立ち尽すようだった。バスの窓から志津子に一瞥ひとくちも与えなかったが、勇吉はそのことに満足していた。

高行たかゆきは左頬に意地悪い視線を感じた。左席の中年男が高行の貧乏揺すりを非難しているのだ。これで二度目だった。高行が貧乏揺すりをやめると、中年男は徐ろに週刊誌に眼を落した。咎めだてされた気の悪さに高行はじろりと中年男を見返した。ふてぶてしい横顔の、ざらざらしたきめの荒さが軽石を思わせた。嫌な奴と隣り合わせになったものだ。高行は中年男の膝の週刊誌に眼を移した。グラビヤの頁にはフランス帰りの高名な女優が微笑していた。めぐみに似ていると高行は思った。しかしめぐみの眼はこんなに柔和ではない。美しい眼かも知れないが、めぐみの眼は絶えず黒眼の動く眼だっ

た。高行はめぐみの京都訛を思い出した。めぐみのそれは、いわゆる京都弁らしさからかけ離れたものだった。まくしたてるような早口であり、女の子の学生言葉にありがちな投げやりめいた品の悪さがあった。しかし、高行を呼ぶ「お兄ちゃん」の一言には京言葉独特の柔かなニュアンスがあった。高行はポケットから電報を取り出した。

「チシス ハハカナシム オニイチャンノバカ メグ」めぐみのまぐし立てる声が聞える電報だった。その以前にめぐみは父危篤の電報をもよこしていた。父への反抗だけのために高行は帰らなかった。が、父は死んでしまったのだ。チシス ハハカナシム オニイチャンノバカ……、めぐみは悲しんでいるのだろうか。としたら、めぐみは泣いたのだろうか。高行はめぐみの涙を知らなかった。車掌に返電を打たせようと高行は思った。

「キョウ ツバメニテカエル バカヨリ」めぐみの電報の裏にこう書いてみたが、高行は「バカヨリ」を消した。悪ふざけは死者への冒瀆ぼうとくである。死者となつてしまった父を思うとき、全ての過去は忘れるべきだと高行は思った。何時の間にか高行の左膝はまた小刻みに揺れていた。すると中年男はじろりと高行を見た。高行はその視線を無視した。わざと膝を揺すぶり続けた。中年男は下卑た舌打ちをし大きく身体を一揺すりやると煙草を取り出した。一本くわえてマッチを探そうだった。すかさず高行はラ

イターを出しカチツと鳴らした。青い焰を上げるライターを中年男の鼻先へ差し出した。ことの意外さに中年男は戸惑ったようだったが、首を突き出し気味にすつと喫いこんだ。そして同時にひよいと会釈をした。小売商人の物腰だった。傲慢そのものに見えたこの男は見事に裏返った。

「ええライターをお持ちでんな、ロンソンでっしやろ」と中年男は云った。「わたしもそれと同じのを持てましたけどね、ビロウな話ですんまへんが、トイレへ入って俯向いた途端、上着のポケットから滑り落ちよりましてん、ああ四千五百円の泣き別れ……あの時の氣イは忘れられまへんわ」

図らずも高行はこのライターを盗んだ時のことを思い出した。高行の経験の中でも快調に運んだものの一つだった。デパートのライター売場だった。あれもこれもと高行は高級品を並べさせた。店員が他を出そうとウィンドウの中に身体をのり出した時には、このロンソンは高行のポケットに滑り込んでいたのである。仕立のよい背広を着こなした長身は、いささかの怖じけも見せず、且つ限度を弁えた品の良さが見られた。しかも高行の整った眼鼻立ちはある皇族に似ていた。これらを巧みに利用することで盗みはごく容易に実行出来るのだった。

車掌が通りかかった。高行は呼びとめて頼信紙を求めた。

「すぐ書くから」車掌を待たせて高行は素早く

書き入れた。めぐみ宛にしたが、思い直してふじ宛に書き改めた。二年振りに帰洛するのに、義母宛にするのが礼儀だと思つたからである。そういう律義さを高行は持っていた。車掌が去つてからも、隣席の男はしげしげとしゃべりかけてきた。相手を去勢するつもりで点けてやつたライターだったが、逆効果をもたらしたようだった。

沼津に停車した。乗って来た客の中に中年の男の知人がいた。その男の席は、中年男のすぐ後ろだった。前と後で一しきり話を交していたが、中年男は高行に云つた。

「すんまへんけど、後のと席替つて貰えまへんやろか、わたしの旧友でんね」

にべもなく高行は断わつた。しかし断わらねばならぬ理由などないのである。むしろ高行はこのうるさい中年男から離れたい位なのだった。中年男は尚もしつこく高行に頼んだ。高行は咄嗟に断わるための理由を作り出した。

「僕はわざわざ窓際の席を指定して取つた位なんですから」

「そうでっか」

中年男は不意にもとの傲慢な眼つきに戻つた。刺すように高行を見ていたがすぐに高行の後の席の女に頼み始めた。鄭重を極めた言葉で替つたことは快諾したことにはならなかった。その証拠に女の表情は明らかに不快さで歪んでいた。

高行の隣の席に腰を下すと、女は和服の膝の上で両手の指を組合わせた。マニキュアのいぶし銀に近いピンクの色が、色白の骨っぽい指にぴったり合っていた。その指の重なり方が左の親指が右の親指の上に重ねられてゐるのに高行は気付いた。この女は感情型だと高行は思った。高行の指の重なり方はこの女とは反対だった。こういう迷信を高行は一概に信じはしないけれども、種々の迷信に通じることが好きだった。趣味のようなものだと思つていた。

高行は煙草を取り出した。一本抜き取ろうとしたがふと思ひを変えて黙つて女の前に差し出した。女はまじまじと煙草を見詰めていたが悪びれずすつと抜き取つた。しかし高行が火をつけてやつても礼はおろか、会釈すらもしなかった。煙草の煙といふし銀的ピンクの爪の色は誠にふさわしかった。高行は飾り気のない女よりも、虚栄の匂いを多分に含んだ人工的なものを巧みにこなし切っている女にひかれがちだった。それどころか取りすました女にひかれるのである。「お兄ちゃんのエセ貴族趣味」とめぐみがわらつたことがあった。家政婦上りのふじを母に持つめぐみの嫌味でもあったが、確かに高行は貴族的な雰囲気が好きだった。といつて、高行は母方の祖母が公卿の出だったことを別に誇りと思つてゐるわけではなかった。むしろ高行は母の血を恐れていた。高行の母は高行を産んで間なしに狂死したのである。高行にとつての〈母〉は死んだ母よりむしろ義母のふ

じだった。育ての母として、高行はふじを心ひそかに愛していた。白粉気もなく、夫峰行の年齢を慮つて地味すぎるほどのふじだった。蜂行を失つて呆然自失しているであらうふじを、高行は容易に想像出来た。そしてふじの心を占める悲しみと全く同質の悲しみが自分の胸にも広がりはじめてゐるのに気付く、高行はうろたえた。高行はやけに煙草を喫ひ続けた。

バスを降りると、駅ではまだ改札は始まつていなかった。勇吉は切符を買つてから、そばの売店に立つた。チョコレートを買うためである。チョコレートは煙草を喫わぬ勇吉の嗜好品なのだった。勇吉は売店の娘に声をかけた。しかし娘は工員風の若い男と夢中で喋りつづけていた。もう一度勇吉は声をかけた。娘はやつと顔を向けた。そばかすの浮いた色白の顔が上気していた。この娘は多分相手の男が好きなのだろう。咄嗟に勇吉は志津子を思い出した。娘は求められるままに勇吉にチョコレートを差し出した。

「あ、いや、大きい方、五十円のだ」

云われて娘はのろろと取り替えた。引きかえに勇吉は千円札を出した。

「細かいのありません？」と、娘は如何にも釣銭がないのだと云わんばかりの表情をした。

「ないんだ」

娘はしぶしぶ千円札を受取り、釣銭の百円札を数え始めた。充分に釣銭は用意されているの

だ。ぶくぶくした娘の指先を見乍ら勇吉は思った。《女ってものは全く自分本位なものだ》

勇吉は釣銭を渡すや否や娘は男と喋り始めていた。勇吉は重ねられた百円札を改めた。男を眼の前に置いて気もそぞろの娘のことだ、ひょっとすると百円札は八枚しかないかもしれないのである。しかし百円札は十枚あった。二度数えたが二度とも十枚だった。五十円のチヨコレートを只で手に入れ、尚且五十円銀貨が全く旁なくして勇吉の手に転りこんできたのである。

《僕はついているな》と勇吉は思った。そして何気なく覗いた売店横の鏡に、今にも笑いそうににッと口をまげている自分の顔を見て、勇吉は思わず笑い出しそうになった。しかしめつたにのびやかな笑いなど浮べたことのない勇吉は、出そうになった笑いを素早く口許から引込めた。眼は笑っていた。勇吉は思った。《これがおふくろを葬って来た息子の顔だろうか》決して自嘲ではない。自らへの讃美だった。

汽車は空いていた。シートの真中にゆつたりと腰を下し、勇吉は、二十年間を育ったこの彦根の町にも、もう来ることはないだろうと思つた。この町には祖母にまつわる思い出が数限りなくあった。祖母だけは勇吉の絶対の人なのだ。祖母を思う時勇吉の乾いた心にも甘酸っぱくかげるものがあった。勇吉は柄にもなく呟いた。《お祖母ちゃんが大好きだった彦根の町よ、さようなら》しかし呟き終った時には、勇吉は祖母にまつわる過去とも鮮やかに手を切つてい

た。勇吉には計り知れぬ重みを持つ前途が用意されていた。過去の町彦根などもう二度と見たくもないのである。《京都で一旗あげる》これは勇吉の夢であり、また祖母への誓いの言葉でもあった。小さな城下町に育った勇吉には、京都は大会だ。そこで成功することを思うだけで勇吉は誇らかな気分になれるのだ。勇吉は胸を張った。《僕はやってみせるぞ》しかし現在の勤め場を思う時勇吉はがっかりせずにはいられなかった。母校の教師の紹介で住み込んだ大倉電気店は極く小規模の小売店だった。よく丁稚小僧といふけれども、勇吉は丁稚の役目も兼ねさせられた。テレビの取付けは無論のこと、ラジオの修理から組立まで出来る勇吉だが、辛抱して勤めて来たのである。母という名の重荷がなくなつた今、もつと冒険をしてもよいのではないか。たとえ失職しても、そしてそれが原因で強盗や殺人を犯したとしても、勇吉を責めたり、また泣いたりする母はもういないのである。《何をしても自由なんだ。与えられた道を歩むだけなら誰にでも出来る。僕はそんなことで満足はしない。人生なんて云ってみれば一つの賭だ。僕はこれからの新しい人生に、僕の野心を賭けるんだ》ポケットの中で勇吉はさっきの釣の百円札を握りしめた。

既に汽車は発車し、ぐんぐん速力を増していた。勇吉はチヨコレートを出してかじり始めた。身長一米八十釐のこの男は、童顔のおかげでチヨコレートをかじつても結構似合つてい

た。祖母は仲々チヨコレートを買ってはくれなかった。そのせいでもないだろうけれど、勇吉はチヨコレートをかじる時いまだに鬼の首でも取つたように嬉しいのである。《あの頃は買えなかったチヨコレートを今では好きな時に手に入れることが出来る。よし、僕は、今は自由にならなくても将来は必ず手に入れるようになってみせるぞ》自分の若さが勇吉は誇らしかった。二十二歳という年齢は、これから第二の人生を踏み出すのに全くふさわしい年齢に違いなかった。

女は遂に一言も口をきこうとしなかった。京都駅のホームに降りたとき高行は女の背後に近寄つた。

「よかつたら僕の手でお送りしましょう」
「……？」

振り向きざま、女はまじまじと高行を見た。さっき車中で出した煙草を見詰めたのと同じまなざしだと高行は思った。《じっと見詰めるのはこの女の癖らしい。近眼なのかもしれない》

高行は云った。

「車が迎えに来ている筈なんです」

「あら、わたしもですよ」

お生憎さまねという眼になって高行を見上げたが、女はすぐに歩き出した。高行はわざと後をつけた。アップにした袴足が驚くほど白い。袴なしのふじ色の防寒コートが華奢な身体をふ

わりと包んでいた。取りすました裾さばき。その下で小刻みに運ばれる小さな足は艶やかなナイロンの白足袋で見事に締め上げられ、分厚い草履の上にちんと納まっていた。

西出口を出るともう冬の四時半はたそがれていた。駅前には何台もの乗用車が駐車してゐる。高行は自分の車を探しもせず女の視線を追った。女の視線は近寄って来た中肉中背の如何にも伊達者といった男にそがれた。男に荷物を持たせると、女は先に立って歩き、車に乗った。そして女の車は去った。

不意に高行は腰のあたりを押された。めぐみだった。ぐっと身丈が伸びていた。

「何しての、ぼやッと立ちん棒して。さっきから手エ痛うなるほど振ってたんよ」

運転手は高行には初顔だった。もう三十歳に近い年齢に見えた。片眼の細い男である。フランク永井に似ていると高行は思った。ずんぐりした身体つきまでがフランク永井を思わせた。しかし身のこなしは驚くほど敏捷で腰の低さはうんざりするほどだった。車は走り出した。めぐみは高行をジロジロと眺め廻して、

「お兄ちゃん、二年ほどの間に何や男臭うなったなあ」

めぐみのよく伸びた両肢はびっちりとは立ってられた黒いストラップに包まれて盛り上がった。いた。めぐみはもうすぐ十七歳になる筈だった。「お兄ちゃん、そないして澄しとると二十一しゅうじゅういちに見えへんわ、二十四、五に見えるわ。なア下路

さん」

運転手は大形おほがたに身体全体で同意し、まだそれでも足りないとおもうのか、

「ほんとです。坊ちゃんはいっかりしてられますからね。男は年より上に見られんとあきません」

高行は眉をしかめた。男の京都弁は聞いていられないのである。

めぐみはよく廻る舌で学校のことを喋り始めた。峰行の死については何も口に出そうとしなかった。高行は窓外へ眼をやった。街路樹がぎつぎと後へ去った。往交う車の数が嘘のように少なかった。人道をゆく人の数も少なかった。しかも街自体が眠ったように沈んでいるのだ。空気が凝こんでいる、というよりいっそ死んでいるといった方が似つかわしいと高行は思った。

「まるで葬式の中を走ってるみたいだな」

めぐみは怪訝けつげんそうに高行を見て、

「何のこと？」

「京都は東京とは違うと云ってるんだよ」

「京都をくさしてるのん？」

「くさしてやいないさ、おれ、京都は大好きなんだぜ」

「ふん、けつたいなお兄ちゃん」

めぐみは肩をすくめた。

「下路さん、ラジオかけて」

下路は心得たようにムード音楽を捉えて波長を合わせた。高行はむっつりとして、

「音楽はよそうや」

「なんで？」

「おやじが死んだんだ」

「そんなこと云うぐらいやったら」めぐみは開き直った。「何ではじめの電報で直ぐ帰って来やへんだん？ お父さんとても待ってはったんよ、だいたいお兄ちゃん云う人は」

「もういいよ」

高行は遮った。そして下路に云った。

「おい、ラジオかけろよ」

下路は再びスイッチを入れた。だが高行への気兼ねだろう、音はぐんと小さかった。高行は云った。

「もっと大きくしろよ。いや、もっとだ」

へやっぱり京都はいいなあ、ぐっと活気があゝる」駅前に立った勇吉は呟いた。

駅そのものは別として駅前の眺めはおおよそ京都らしくない雑然さとやぼったさが見られた。観光京都の玄関口にしては、余りにお粗末な眺めなのである。それを胸ふくらむ思いで勇吉は眺めたのだ。

勇吉はすぐに店へ帰る気はなかった。どうせゆくゆくはあんな電気屋なんか辞めてしまうのだ。お勤め大事と急いで帰ることはない。それに母の家財道具を売り払い、その僅かながらの代金が勇吉の懐を賑わせていた。好きな鰻井を食べて映画でも見て帰ろう。四条河原町に出て鰻屋に入った。それから京極をぶらぶら歩き、

ふと気の向くままに映画館へ入った。丁度休憩時間だった。売店で勇吉はまたチョコレートを買った。《余分に金を持っているってことはないもんだ》と勇吉は思った。映画の前に宣伝のスライドが映写された。どれも俗悪な色調だった。たった今入ってきた鰻屋の広告もあった。勇吉の母と同じ名の《サキ》というバーの広告もあった。恐らくそのマダムの名が《サキ》なんだらうと勇吉は思った。およそ古めかしいと思っていた母の名もこんな風に取り上げられてみると、仲々つきりしていた。《サキ》の広告が消える直前に、勇吉は同じ画面に《バーテン見習募集》という文字があるのに気付いた。面接五時半までという文字を読み終った時その広告は消えた。

バーテンなど勇吉の思いもしなかった職業だった。しかし、酒も煙草もたしなまぬ男がバーテンを志望しても悪いわけではないのである。ひょっとして客の中に出資者の形で勇吉の人生を決定づけてくれる男が現われぬとも限らないではないか。勇吉は時計を見た。五時を廻っていた。面接は五時半までだ。勇吉は席を立った。そして映画館の事務所を訪れた。バー《サキ》の所在地を聞く為である。《サキ》は高瀬川に沿った木屋町の一角にあるとのことだった。

「面接は五時半までですよ」

女事務員は親切に教えてくれた。

勇吉はその足ですぐバー《サキ》を訪れた。

彫刻を施した重々しい扉の横に、バーテン見習募集の紙がピンでとめてあった。勇吉はためらいもなく扉を押した。五坪足らずの店だった。客はなく、女が二人とバーテンらしい男が一人居た。

「広告を見て伺ったんですが」と勇吉は云った。

和服の女が云った。

「あんた幾つ？」

「二十二歳です」

「そう。長谷さんどうしましょう」

「そうだな」とバーテンの長谷は腕時計をちらと見て、「ママ、もう家に着いてるな、電話しろよ」

女は気易くナンバーを廻し始めた。相手が出た。

「もしもし、ママさん帰ってらっしゃる？ あらそう、じゃあすみませんけど出て貰ってよ、あたし、直子……」

すぐマダムが出たらしかった。

「あらママさん、お疲れさまでした。東京は如何でした？ ……あのね、今バーテン見習いの男の子が来てるんですけど。え？ 年は二十二ですって。背の高い眼の可愛い男の子ですわ。そうですか、じゃ待っててもらいます。はいはい、分りました。」

直子は受話器をかけて、

「あと三十分ほどしたら行きますって」と長谷に告げ、勇吉に、

「そこへ掛けて待っててよ。それともパチンコでもしてくる？」

「僕、パチンコは嫌いなんです」

「へーえ、変ってるわね」

直子は大形に驚いて見せた。勇吉は隅の椅子に腰を下した。ぼんやりと室内を見廻した。《ここが僕の新しい職場になるのかもしれない》しかしそれはピンとこなかった。

峰行は二階の十畳の和室で北枕に寝かされていた。喉頭癌の手術を受けてから三ヶ月目の死だった。鶴のように痩せていた。六十一歳と見えぬ皮膚の枯れようだった。白い絹のマフラーが首を柔かく包んでいた。手術の跡を隠すためか。しかしそれは峰行という死者を飾るのにふさわしい唯一のアクセサリーに見えた。生前には見られなかった縮りなさで、薄い唇は僅かに開いていた。端正な鼻に詰められた綿に眼をとめた時、高行は不意に立ち上った。廊下を折れて階段を降りていった。峰行の部屋の下が高行の部屋だった。昂然と頭を反らせ、高行は畳の上に正坐した。高行の眼には涙が溢れていた。

峰行の手術の時、高行は帰らず、見舞の手紙すら出さなかった。しかも父危篤の電報まで高行は無視したのである。これほどの悔いが残るなどと思ひもしなかったのだ。激しい悔いが冷酷なまでに高行の心を身体を締めつけた。何時か高行は両手で顔を覆っていた。峰行の死を悲しむ自分を高行は素直に認めないわけにはゆか

なかった。そしてその反面で高行の脳裏に、見ず知らずの女、佐木緋絹子の手紙の文面が鮮やかに甦ってくるのだった。一年前に高行が東京のアパートで騒ぎを起した時にその手紙は寄せられたのである。

「新聞であなたの服毒自殺未遂のことを知りました。そして私は血のつながりというか因縁というか、何か不気味なものを感しました。あなたはやはり私の父佐木恭助の子なのです。私の父は三十八歳の時自ら縊れて世を去りました。厭世観も多分にその原因となっていたようですが、直接の原因はあなたのお母さんに裏切られたためだったようです。その間の事情をあなたは何も御存知ありません。あなたはまだお母さんの胎内で眠っていたのですから。私はもう小学校の四年生にもなっておりましてから、周囲の者たちの話からその事情は知っていました。あなたのお母さんの顔もよく覚えております。ひょっとしたらこの人が私の二度目の母になってくれるのかも知れないと私は半ば期待していました。半ばと申しましたのは、半ばは期待していませんでした。人あたりは実に柔かく、それはもう至れり尽せりに見えて、その実、口先ばかりで芯は冷たい人だということ、子供なりに私は見抜いていたのかも知れませんが、あなたのお母さんは父に背き、あなたを妊ったままあなたのお父さんのもとに嫁がれたのです。あなたのお父さんはすべて

御承知の筈です。あなたのお父さんは、よくよくあなたのお母さんを愛していらしたのでしよう。私は父の無惨な死様を見て、あなたのお母さんを恨みました。あなたのお母さんなんか早く死んでしまえばよいのと思いましたが、昔の話に、人を恨んだ挙句に藁人形を作り、毎夜丑三時にその胸を突き刺し、恨む相手を呪い殺すというのがあります。そんな話を祖母から聞いて知っていた私は、手足のもげた人形を引っぱり出し、それをあなたのお母さんだと思って毎晩針でその胸を突きました。私の呪いの気持が通じたのでしようか、あなたのお母さんはあなたを産まれたあと気がふれて、そのまま亡くなられたと聞きました。私は恐ろしさと嬉しさの交錯した気持ちで、二、三日は眠れなかったことを今も覚えて居ります。

私の父は縊れて死に、父を苦しめたあなたのお母さんは狂死されました。しかも私の夫は(夫のことなんかあなたには関りのないことですが)溺死しているのです。私につながる人間の異常な死様を思うとき私は私と血を分けたあなたのことが不安になるのです。

ここまでお読みになり、あなたは、この手紙でいったい私が何を云おうとしているか疑問にお思になるかもしれません。はっきり申し上げましょう。近い将来必ずあなたは自殺するにちがいないということを、私はあなたに暗示したいのです。こうはつきり書いて

しまえば暗示にならないかもしれませんが、この手紙に反撥を感じて強く生き抜かれようと、また暗示にかかって自殺なさろうと、それはあなたの自由です。ただ私は、一度自殺を企て失敗なさったあなたが、再度の自殺を企てられる場合、今度は必ず成功するという自信をお持ちになれると思うのです」

住所の認めてないこの手紙の消印は、小石川のものであった。根本的にこの手紙には、ずれがあった。

高行の自殺未遂は、自殺未遂ではなかったのだ。あの日、高行は自殺しようなどという気持は夢ほどもなかった。それなのに、不意に吐瀉して倒れ、吐瀉物の中から砒素が発見されたのだ。

危く一命を取りとめた高行は取り調べを受けた。高行は自殺だと述べた。取り調べに当たった刑事は毒物の出所を追求し、高行は友人の兄が経営する医院の薬局から盗み出したと答えた。事実そういう友人はいたのである。どうして持ち帰ったか「その容器はどこへ捨てたか」というさいほどの取り調べを受けたけれども、高行はうまくとぼけ通した。高行はこの事件の背後には犯罪のあることを知っていた。しかし、その捜査を当局の手に委ねる気にはなれなかった。高行はその日、自分の胃の中へ入った食物を一つ一つ算え上げようとした。しかしその必要はなかった。なぜならば高行はアパートに住み、食事は全て外食で済ませていたから。レス

トランで食った食物の中に毒物が混入されていて、たとは考えられないのである。高行はこう考えて、一つの可能性に思い至り、ハッとなった。

「俺を殺そうとしたのは、おふくろだ」

高行はビタミン剤を常用していた。あの日もビタミン剤の一錠を瓶から掌にのせて、別にあらためせず、すばやく口中に放り込んだけれども、よく見れば、その錠剤は半分に分けて、それをもう一度くっつけた跡があったのはなかったか。巧みに糖衣錠の中の薬品がすりかえられていたのではあるまいか。

そのビタミン剤は、ふじが月に一度は必ず寄こす小包の中に、何時も入れてあるものだった。

高行は瓶に残っているビタミン剤を一錠一錠丹念に調べてみた。しかしどの一錠にも手を加えた跡はなかった。だが、もしもふじが自分を殺そうと企んでいるのだとしたら、一瓶の中のただ一錠だけに薬品を仕掛けばよいことだった。他の錠剤に何ら形跡は見られなくても、あの日の一錠に毒は仕掛けられていたのにちがいないのである。高行を殺し、世良家の財産をめぐみと自分のものにしようとして、ふじがやったことかも知れぬ。高行にはそれがただの妄想とも思えなかった。「俺を殺そうとしたのは、やっぱおふくろにちがいない」そう思いこんだ。だが、佐木緋紹子の手紙が高行の推理を、まどわせたのである。「俺を殺そうとしたのは、おふくろではなく、おやじだったのではないか」

高行は峰行を父だと信じていた。しかもそれは放任主義の、一人息子に甘い親馬鹿だと信じていた。しかし峰行の放任主義は愛情ゆえのものではなかったのだ。それは文字通り放りっぱなしを意味していたのである。自分の出身校に入学させたいからと、小学校を卒えたら、高行を単身上京させたのも実を云えば高行を自分の眼に触れるところに置きたくなかったからに違いなかった。小遣をせびれば嫌な顔もせず幾らでも送ってくれた。それも高行は自分を可愛がってくれたことと己惚れていたのだ。峰行は関西で一二を争う染色会社の社長だった。高行に注ぎ込む金ぐらい痛くも何ともないのである。高行が不良と呼ばれるようになったのは、全く峰行の思う壺に違いなかったのだ。「おやじの偽善者ぶりにうまく引掛ったもんだ」と高行は腹立しかった。手紙を見た日から高行は峰行の温厚な眼を信じなくなった。信じなくなつたのみならず、高行は峰行に疑惑の眼を向け始めたのである。そしてそれだけでは気がすまず峰行をなじる手紙まで出したのだ。十日を経て峰行の返事が来た。その手紙は気障っぽい偽善に満ちていた。峰行は、佐木緋紹子の手紙に示された高行の出生の秘密を肯定していた。しかし、「それを隠し通すつもりはなかったのだ」と弁解し、「ただ真実を語る必要もないように思われただけで」と書いていた。そして「お前を殺そうと思ったことなど一度もない事を神に誓う。それはあくまで

もお前の誤解だ」とも書いていた。

「私はお前の父なのだ」と思いこむために、どれだけの努力したことか。そしてその努力は無駄ではなかったようだ。お前の手紙を読んだ今も私は依然としてお前の父親としての自覚がある。それだけにお前の手紙はお前の想像外の悲しみと失望を私に与えたようだ。しかし私はお前を咎めようとは思わない。今まで一度もお前を咎めたことがなかったように、私は今後も黙って最愛の息子を見守ってゆくだろう。お前がどのように思おうとも、私がお前の父親であることに変りはないのだ」

その手紙を、高行は破り捨てた。高行は父になじる手紙を出した時、心の奥底のどこかで、父が慌てふためいて上京してくることを期待していた。高行の誤解を叱りつけ、且つ、この事件は自殺未遂ではなく、殺人未遂なのだと警察へ乗り込んで行き、当局に捜査を依頼する。そんな父であつてほしかっただが父は上京しなかった。くどくどしい弁解の手紙を寄こしただけなのだ。高行は自分の推理の正しかったことを悟った。ビタミン剤の中へ毒物を入れたのは父だ。峰行なのだ。

高行は、ふと背後にふじを感じた。何もかまわってほしくなかった。遠慮がちにふじは高行の肩に手をかけた。高行は邪慳に肩を動かし、ふじの手を払いのけた。

ふじは云った。

「お父さんはな、あんたが帰ってきてくれはるのを、そらもう、首を長うして待つといやしたんやで。声が出やしまへんやろ、そやさかい、何や云いたそうなお顔をして、じっと私をお見やすのや。高行さんは何ぞ御用でもありますのやろ、けど必ず帰って来やはります、高行さんは心の優しいお子ですさかい、どないにお父さんのお塩梅を案じてはりますことやろ。そう云うとお父さんはうんうん頷いといやした」

ふじは噁り上げていた。そんなふじが高行は煩わしかった。高行は云い放った。

「もういいからあっちへ行ってくれよ」

そして大事に抱えて持ち帰ったケースからサキソフォンを出し、力一杯短音階を吹きはじめた。ふじは黙って部屋を出ていった。サキソフォンを吹き乍ら、響き渡っているにちがいない通夜の客たちを高行は思った。

荒々しい足音がした。めぐみだった。

「お兄ちゃん、ええ加減に止めおし！」

云うが早いか高行の手のサキソフォンを奪い取った。

「お兄ちゃんみたいな親不孝者知らんわ、なんでそないに逆わんならんの？ お客さんがみんな笑てはるわ」

まくしたてるめぐみの怒りを込めた声を聞き乍ら、ふじの涙まじりの声よりはるかに救われると高行は思った。高行は黙ってめぐみの赤いソックスを見ていた。

勇吉はバー「サキ」を出た。手渡された名刺を改めて街燈の下で見た。「佐木 緋紹子」——

「サキ」というのは苗字だったのかと勇吉は思った。ふじ色の防寒コートをゆつたりと身に着けた緋紹子が、扉を押して足早に入って来た時の一分の隙も見せないといった聊か癪症めいた印象を勇吉は思い返していた。齒切れのいい口調だった。東京から帰ったばかりのようだった。くつきりした二重の黒眼勝ちの大きな眼で、緋紹子はまじまじと勇吉を見詰めたが、物を云う時には必ず眼をそらせた。五人連れの客が賑やかに入って来、緋紹子とはよほど馴染と見えて緋紹子を放そうとしなかった。緋紹子はろくすっぽ勇吉の履歴も聞けないままに名刺を出し、

「あさつての十一時半ごろ、自宅の方へ電話して頂戴」

勇吉は「サキ」を出ると急に空腹を感じた。飽きもせずまた鰻屋に入った。鰻屋を出ると勇吉は河原町通りをぶらぶらと帰途についた。店

までは市電に乗るほどの道程もないのである。二階の窓一杯の看板を掲げた間口二間ばかりの電気屋が勇吉の働き場所であり、地だつた。勇吉は腕時計を見た。八時になろうとしていた。店に足を踏み入れると老年期に入った主人がジロリと勇吉を見た。

「只今。遅くなりました」

勇吉は頭を下げた。

「お帰り、どないしてたんや、えらい遅かった

やないか」

「昨日帰るつもりでしたけど、後始末に手が

かったものですから」

「いや、そら構へんのや、普通の時とは違うのやよつてな。彦根からお連れが見えて待つてはんのやで」

勇吉は咄嗟に誰のことか判断がつかねた。

「まだ明るいうちから来てはんのやで。この寒いの、御飯も喰べんと待つてはんのやがな」

主人は二階を顎で示し、

「早よ上つたり。勇さんの許嫁や云うこつちやが、仲々別嬪やないか」

勇吉は通り庭へのドアを急いで開けた。冷やりとした三和土の上り框の前に細面の下駄がちょんと揃えられていた。オレンジ色と黒を燃り合わせた鼻緒に覚えがあった。勇吉は憤りとも不安ともつかぬ気持で靴を脱ぎ捨てた。襖が開いてかみさんが顔を出した。

「勇さん！」

お帰りとも云わずに、かみさんは勇吉をきびしく傍へ呼び寄せて、声の調子を一段下げた。

「女子はんが来てはるけど、今夜彦根へ帰らはるのやろな。なんぼ許嫁かて、泊つてもろたりしたらあきまへんで。ええな、遅ても十時半には帰つてもろてや」

急傾斜の細い暗い階段を勇吉は上っていった。黒ずんだ重い戸を開けた。両袖を胸の前で合わせ、志津子は薄い座布団の上に横坐りに坐っていた。その両膝は純白のショールで包ま

れていた。勇吉を見ると、

「今までどこをうろろしてたん？ 寒うて凍え死にそうやわ」

甘酸いような女の匂いに、勇吉は窓を開けた。窓は大きな看板で覆われてい、開けても一向に開放感はなかった。それでも冷えた夜気が急速に部屋の中に流れてきた。

「勇ちゃん、殺生やわ、締めてちょうだい。ガタガタぶるいなんよ」

志津子は明らかに寒さにふるえていた。流石に勇吉は窓を開めぬわけにはゆかなかった。勇吉は手焙りを持ち階下へ降りた。かみさんは仏頂面で火種を入れてくれ、炭を足した。

「ええか、一寸でも早よ帰ってもらわなあきまへんで」

念を押し、じろりと勇吉を見た。志津子は火鉢をあてがわれるとほんと人心地ついたように勇吉を見て、

「こころ辺に何か取るとこないの？ うち奢るし、勇ちゃんも何か好きな物取ってちょうだい」

「許嫁だなんて、どうしてそんな嘘つくんです？」

「だって、他に云いようないもの」

勇吉は舌打ちしたい気持だった。

「ともかく外へ食いにいきましょう。ついそこにうどん屋があるんです」

「うち、もう動く気がせえへんの」

それは口だけではなさそうだった。勇吉は志

津子を見降す眼が陰しくなるのを感じた。

「突っ立ってないで坐ったらどうやの」

志津子は、ぐいと勇吉の手を引張った。勇吉は思わず膝まずいた。志津子は勇吉の手を放そうとはせず、

「なんで急に出来来たか云うたげましょか」

勇吉は何も聞きたくなかった。湿ったような、生あたたいような、ふにやふにやの掌……。勇吉はすつと手を引いた。志津子は云った。

「うち、駅まで送ったげるって云うてたのに、どうして振り切るようにしてバスに乗ってしめたの？ しかもバスの中から、ちらとも見てくれへんだわね？ あんな別れ方して、じつと家に居られると思う？」

勇吉は黙っていた。一瞬の沈黙の後、志津子はふと声の調子を変えて、

「うちね、書き置きして出て来たんよ」

自分の言葉の反応を勇吉の上に認めると満足したように、

「びっくりした？」と云って笑った。

「うちは思ったら最後、すぐ実行に移さんと気がすまない性分なの。勇ちゃんの知ったことやないかもしれへんけど。迷惑？」と、一寸言葉

を切り、「かも知れないわね」と付け足した。

「うちは出戻りやし、勇ちゃんより年上やけど、でもこうして出て来たんやもの、迷惑やなんて思わんといてね」

「そんな勝手なこと」勇吉は吐き出すように

云った。「ぼく困りますよ」

「勇ちゃんがいかんのよ。もっとうちに優しいして呉れて駅まで見送らせてくれたら、こんなに急に出来なかつたわ。でもいずれは出て来るでしょうけど」

それはかねがね志津子から聞いていたことだった。志津子は実母との間がうまく行かず家を出たいと洩らしていたのである。勇吉は何か食事を頼みに行こうと考えた。でない、空腹のため、志津子は何時までもこの部屋から動こうとはしないだろう。勇吉は立ち上った。

「何処へ行くの？」

「何か云いに行ってきますよ」

志津子は物憂そうに首を振った。

「もうええわ。お話しているうちに胸がつまって何も喰べとうのうなつた。お腹が空きすぎる」とこんなものかも知れへんわね」

そして志津子は勇吉の手をとり、

「勇ちゃん」

と云った。ぎよっとするほど甘ったれた声だった。勇吉は手を振り払おうとしたが志津子は異様なほどの力でその手を引き、勇吉の肩を抱き寄せようとした。勇吉は身をひこうとしたが、既に志津子の両手で抱きすくめられていた。勇吉は両肘を張って身体をゆすぶる、志津子の身体を突き放した。志津子は仰向けに倒れた。後頭部を打ったらしく、起きてから髪をなでるふりをして頭をさすっていたが、傍のハンドバッグとポストンバッグを引き寄せると、意